

Title	カール・マルクス著 マルクス=エンゲルス全集刊行会訳 資本論 ( 第一分冊 )
Sub Title	
Author	飯田, 裕康
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.8 (1961. 8) ,p.730(120)- 731(121)
JaLC DOI	10.14991/001.19610801-0121
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610801-0121">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610801-0121</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

大原總一郎著

『化学纖維工業論』

化学工業は今日のいわゆる「産業構造の高  
度化」「技術革新」の中心的なない手であ  
る。化学繊維は、そのさきがけであり、直接  
的消費にむすびつき、従来の繊維生産・消費  
の構造を大きく変化させてきた。この比較的  
あだらしい産業、しかもきわめて急速なテン  
ポをもって動きつつある化学繊維工業につい  
て、これまで商品学的説明や部分的な業界の  
分析は多々あったが、その体系的な本格的な  
研究は少なかった。

この書は、その意味で、化学繊維工業の諸  
問題についていまままでにない、技術的・歴史  
的・資料的に内容の豊富な書である。それは  
なによりも著者が倉敷レーヨンの社長の位置  
にあり、経験と集大成された資料を駆使して  
完成されたものであることによるといえるよ  
う。

まず第一章緒論において、この産業の特色・  
地位・役割が概括され、二・三・四・五章で、

世界およびわが国の化学繊維工業（レイヨ  
ン・合成繊維）の歴史とその特色がのべられ  
る。六章は、化学繊維の生産技術の進歩と技  
術的特質、加工技術の変化が説明され、七・  
八章は、消費の面から、他繊維との競合、貿  
易市場の問題点が検討される。九章は原料  
（価格）問題、十章において、加工工業の分  
野である絹人絹織物業との関連、系列化の進  
展、さらに化学繊維の価格形成のうえで重要  
な取引所の機能と役割がとりあげられる。十  
一章は化学繊維工業の資本と経営として、原  
価構成、財務構成、企業資本充実の諸問題が、  
本文のほか、詳細な索引・付属統計表・参考  
資料・文献がつづく。

本書はもともと著者が東京大学で行なった  
「化学繊維工業論」の原稿を整理されたもの  
のよしである。いわゆる「産業論」として、  
この産業部門のさまざまな事情・歴史・特  
色・問題点がかなり網羅的に展開されている  
ことではまさに圧巻であるが、それらに貫く  
分析視角というものが明らかでないうらみが  
ないではない。とくに、この産業の急速な発

展の諸要因、ビッグ・ビジネスの間の寡占的  
競争の態様のつっこんだ分析や、価格形成、  
下位加工分野の「二重構造」依存の現状、織  
維産業全体の将来、などの諸問題の関連・客  
観的見通しについて多少のものたりなきを感  
じさせる。しかし、この産業をになう地位に  
ある著者の、その立場からする種々の「発言」  
とみられる諸点は、きわめて示唆にとみ、総  
じて本書は、多面的な性格をもつ化学繊維工  
業の全貌を把握するのに他に類のない著書で  
あるといえる。（東京大学出版会・A5・本  
文五〇二頁・付録一三四頁・九五〇円）

—佐藤 芳雄—

カール・マルクス著  
マルクス・エンゲルス全集  
行 会訳

『資本論』（第一分冊）

われわれ『資本論』に学ぶものにとつて、  
それを読みながら常々感じることとは、その比  
類ない難解さということではなからうか。全  
三部よりなっている『資本論』は、マルクス

自身の手で仕上げられた処は第一部のみにす  
ぎず、第二、第三部は草稿ないし未定稿とい  
う形で残され、エンゲルスの助力を得て現行  
のような姿をとるにいたった。したがって、  
とくに第二、三部においては草稿ないし彼の  
抜書きがそのまま入ってきており、それらを  
一貫した・統一的な論述として理解すること  
は非常な努力を要する。また第一部において  
も（あるいは全体的にも云えることだが）全  
体を統一している独自の論理とそれからする  
内容そのものもつ奥行きは読者に相  
当の覚悟を要求する。かかる「難解さ」を克  
服し、マルクスの云わんとすることをより良  
く伝えようと、『資本論』は刊行以来幾多の  
版本をもつことになった。わが国においても  
すでに数種に及ぶ訳業があり、それらが日本  
語をつうじてマルクスの思想を正しく伝えよ  
うとする為の企図からであるとともに、多く  
の訳業に、わが国における資本論研究——マ  
ルクス経済学研究——の発展が貢献している  
ことは否定出来ない。今度、新たな訳業のな  
った『資本論』の訳者たちも、かかる過去の  
研究の成果を高く評価し、その現われとして

の新訳の意義を強調していることに注意する  
必要がある。

さて、マルクスが『資本論』に関する仕事  
にたずさわった時期は一八六〇年頃から彼の  
死（一八八三年）まで約二〇年間にわたる。  
そして現行の第一部が刊行されたのは一八六  
六年である。従って数年後にわれわれは刊行  
一〇〇周年を迎えるわけである。資本論執  
筆時代がまさに国際労働運動史上最も重要な  
時期であり、その主要なる指導者としての忙  
しい毎日を送りつつ、病いと闘いながら『資  
本論』が書かれたように、以後の資本論研究  
の歴史は国際労働運動・社会主義運動及びそ  
れらへの反動弾圧の中で遂行された。資本  
論研究の一世にわたる歴史は、そのまま労  
働運動・社会主義運動の一世にわたる歴史でもあ  
った。いま、最新版『資本論』を手にして、  
その歴史をさらに深く回顧するとともに、そ  
のゆく手をみつめなくてはなるまい。

新訳は、現行アドラツキー版、最新版本で  
ある東独ドイツ社版をテキストとして訳出  
し、現在刊行中のマルクス・エンゲルス・レ  
ーニン研究所編纂『マルクス・エンゲルス全

集』第二三—二五巻所収『資本論』（К. Ма-  
ркс: Капитал. Книга политическая  
экономи. 1960-61）の訂正と注解とを取入  
れ、その他各国語版本が参照されている。現  
在、すぐれた訳本として長谷部文雄、向坂逸  
郎両氏のものがあるが、それぞれ訳文の特  
徴があり、それが難点ともされてきた。新訳  
では、日本語として通じるということを目標  
に両氏の訳の長所をとり、無理のないもの  
にして努力がみられる。特に留意されるべ  
き処は、テクニカル・タームの訳が、長谷  
部・向坂両氏のごとき独自の解釈によらない  
で、学界での永年の論争の成果としての共通  
のタームが用いられていることである。また  
巻末に人名文献索引がつけられている。かか  
る点にも、読み易い『資本論』をめざした訳  
者達の意図はある程度まで成功しているの  
ではなからうか。（大月書店・国民文庫版・二  
八九頁・一五〇円）

—飯田 裕康—

新刊紹介